
黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

佐藤よしあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

【Zコード】

Z6909Z

【作者名】

佐藤よしあき

【あらすじ】

「キセキの世代」を有し、輝かしい成績を残した帝光中学バスケットボール部。その中において「キセキの世代」と同等以上の才能を持ちながら「キセキの世代」によつて目立つことのなかつた存在がいた。

「黒子、君は自分が影だと言つ。ならば私はこいつ言おう、私は闇だ。」

プロローグ（前書き）

主人公が少し性格悪いです、それでもいいなら読んでください。

プロローグ

帝光中学校バスケットボール部

部員数は100を超えて、全中3連覇を誇る超強豪校。

その輝かしい歴史の中でも特に「最強」と呼ばれ無敗を誇った10年に1人の天才が5人同時にいた世代は「キセキの世代」と言われている。

ーが「キセキの世代」には妙な噂が2つあった。

”誰も知らない 試合記録もない
にも関わらず天才5人が
一目を置いていた選手がもう一人
幻の6人目がいた”

そしてもう一つ、

”公式の試合においては目立たず
華やかな記録が有るわけでもない
にも関わらずほぼ全ての選手
「キセキの世代」さえも恐怖した
「神の守護者」がいた”

と

プロローグ（後書き）

思いつきで始めました、変なところがあるかもしれませんご容赦
ください。

短いですが1話目投稿です。

「いや――――！」

私立誠凜高等学校では入学式も無事終わり、新入生の部活勧誘の声が飛び交っていた。

「ラグビー興味ない？！」

「日本人なら野球でしょ！」

「将棋とかやつたことある？」

「水泳！チヨー・キモチイイ！」

手当り次第に声をかけてくる先輩達に流石に痺れを切らしたのか、

「進めーん？ラッセル車持つてこい！それがブルドーザーでガーッ
と！」

「10分で5mも動けねえー…。ってか、キレすぎだろ！」

とうとう新入生2人組がキレ、大声をあげた。
…もつともこの人混みと喧騒では誰にも聞こえておらず、たいした効果はなかつたが。

「勧誘か…ぐだらない。部活動とは自分からやろうという気持ちがなければ上達などしない。部費確保のためだけにする活動のなんと無駄なことか。」

聞こえていたら印象の悪くなりそうなセリフを平氣でいう青年。

彼の名前は白崎誠。

彼も新入生なのだが、彼に勧誘をかけるものは皆無。
白髪に鋭く細めた赤い目、ぶっちゃけ怖すぎて誰も近づくものはない
なかつた。

「バスケ部はどこだ・・・」

「バスケ部ブース」

「じゃ、ここに名前と出席番号ね。」

「はい。あとは…出身中学と動機?」

「あ、そちら辺は任意だからどうでもいいよ。」

（なかなかの逸材ね）

軽いやりとりを済ませた受付の女生徒は先程までいた男子生徒を見て顔を綻ばせ、集まつた入部届を数えていた。

「つと…今10人目か。もーちょい欲しいかなー。（勧誘の方はどうかなー？頑張つて有望そうなの連れてきてよねー）」

「連れて…きました。」

と、思った直後男子部員が一人泣きながら帰つてきた。

「（連れて…こられとるやんけー？！しかも目の前に野生の虎でもいるみたいな迫力…！こいつ何者！？）つで、知つてると思うけど…」

様々な事を思いつつも説明を始めるがすぐに目の前の青年によつて遮られる。

「そーゆーのいいよ。紙くれ。名前書いたら帰る。」

そのセリフに動搖しつつも彼の書いた入部届に目を通す。

「（中学はアメリカ…！？本場仕込みつてワケ。火神大我君か、タダ者じやなさそーね）」

思いがけない逸材に口角があがるのを抑えられない。

と、そこである事に気付き思わず声をもらす。

「あれ…？志望動機はなし…？」

その呴きに対し青年、火神は無造作に言葉を返す。

「…別にねーよ。どーせ日本のバスケなんてどこも一緒だろ。」

そう言い捨て火神は去つていつた。

「すみません、バスケットのブースはここですか？」

「どうよ、と続けようとしたが相手の顔を見たとたん声がとぎれる。

」（――・）」

隣にいた男子生徒も似たような思いなのだろう、若干ふるえている。

「記入しておきました。これからよろしくお願いします。」「あ、うん。よろしく・・・」

生返事で返し、入部届を受け取る。そして、誠が帰ったとたんに

「（虎の次はオオカミか。猛獸使いはこないかね。）」

若干現実逃避をしていたが、隣に座る部員の声に我に返る。

「一枚入部届集め忘れてるっスよ。」

「え？ あ、ごめん、ありがとう！」

「そう言われ紙を受取りつつ名前を確認するとそこには”黒子テツヤ”的だ。

「（あれー？ずっと帳番してたのに…全く覚えてない）」
と、不思議に思いつつ紙に田を通していきある一点で止まってしまった。

「つて帝光バスケ部出身…つて、セツキの白髪も…今年1年つて…」とはキセキの世代の…？」

「セツキのヤツはアメリカ帰りだし…今年1年ヤバイ…？」

先輩に騒がれているとは露知らず渦中の1人である黒子テツヤはある場所へ向かっていく。

「きたか、黒子。あいかわらず読みにくい表情だ。」「すみません。」

お互に口数が多いとはいえない2人。じつはひぐみ合つて、最初に口を開いたのは白崎だった

「黒子、おまえは高校でもバスケを続けるのか？」

「はい、そのつもりですが。」

「なんとも無謀な賭にでたものだ。この新設校でおまえの新しい光を見つけられるとでも？」

「…」

「だんまりか、まあいい。私はおまえを敵にせずじて安堵している。これからともに頑張りうるじやないか。」

「はい、よろしくお願ひします。」

「ではまた明日。」

「さよなら。」

（黒子サイド）

誠君が帰った後もじつとその場を動かないで、頭の中ではいろいろと考えていた。

なぜ誠君はこの高校へ入学してきたのだらう

彼を敵に回すことがないのは喜ぶべきことだらう
だけどなぜ強豪でもないこの高校へ？ほかの5人と同じくらい勧誘
はきていたはずだ

僕と同じ考え方？

「いや、それはありえないでしょう・・・」

ある意味キセキの世代で誰よりも「アレ」に執着していた。徹底的
といつていいくらいに

「まあ、いくら考えても推測にすぎませんね・・・」

直接聞かないとずっと謎のままだらう。そう結論付けて帰路につい
た。

「バスケ部ブース」

「ねえ、これどう思う？」

女生徒は先ほど集めた入部届の一枚、その中の「動機」の項目を男
子生徒に見せた。

「ん？なんか変？スポーツやってるやつならだれもが思つてること
じゃん。」

「なんだけど・・・」

「あれ？こういう考え方持つてる奴って好きじゃなかつたっけ？
なんか変な感じなのよね・・・」

入部届をみながらうなる女生徒。動機欄にはこう書いてあつた。

「完全な勝利を手にするためこ

→NGシーン→

「ええっ！？」

「うおっ！？なになに！？」

「ねえ、これどう思ひ？？」

「なになに・・・「誠凜の誠の文字が私の名前と同じ、運命を感じました。」あれっ！？意外とロマンチスト！？」

「じょもない運命だわね・・・」

「わ――――！」（後書き）

いかがでしたか？感想もうえるとうれしいです。

「黒子はボクです」 「白崎は私です……」（前編）

少し長くなりました。

「黒子はボクです」 「白崎は私です……」

翌日

体育館にて・・・

「よーし全員揃つたなー、1年はそつちな

2年生の声で順に並んでいく。

「なあ、あのマネージャー可愛くねー？」

「2年だろ？」

1年生の視線の先には昨日のショートカットの女生徒。

「けど確かに…もつちょい色氣があれば・・・」

「だアホー違うよー！」

「あいて！」

バキキッと後ろから突っ込んだのは眼鏡をかけた先輩。

・・・

「男子バスケ部カントク、相田リーヴです。よろしくー。

そう言つたのはマネージャーだと思われていた彼女。

「ええ～～！～～？（カントク！～）」

1年生の叫びがあがる。

「「うるさい……。」

誠は不機嫌だった。

（あっけじゃねーの！？）

1年生の視線は体育館の端に立つ杖をついたコボコボのじこせんの
もとへ集まる。

「あいや顧問の武田センセだ。見てるダケ」

1年生の心情を察してか相田が言つ。

動搖する1年生に相田は更なる爆弾を投下した。

「…………じゃあまずは、シャツを脱げ！…」

「え、え、え、～～～～～（なんで！？）」

「監督権限使つた変態行為、なんとも嘆かわしいことだ……」「そこおつ！～！誤解を招くこと言わないつ！～！」

しつかり聞こえていたようだった。

そして、言葉通り、上半身裸にされた1年生男子諸君。

はたから見れば異様な光景だ。

「…………なんだコレ……」

その言葉は至極当然な意見だらう。相田は一年生の前を歩く。

「キミちょっと瞬発力弱いね。反復横飛び20sec／50回位でしょ？バスケやるならもうチョイイほしいな。キミは体力タイ、フロ上がりに柔軟して！」

次々と指示を出して行く。

「マジ・・・・・？合ひてる・・・・・

「どういとー？」

「てか体見ただけで・・・・？」

1年生の疑問に先ほどの眼鏡の先輩が答える。

「彼女の父親はスポーツトレーナーなんだよ」

データをとつとトレーニングメニューを作る。毎日その仕事場で肉体とデータを見続けてるうちに身に付いた特技。

【体格を見れば彼女の眼には身体能力が全て数値に見える】

「（なるほど）・・・学生で監督を任される力は持つているところ」とですか。」

少し感心した。しかし上半身裸の男をジロジロみていくその姿は、知らない人が見れば十分怪しい。

「一」

次にカントクの眼に止まつたのは・・・

「・・・なんだよ？つか寒みーんだけど」

ほかの1年生に比べて頭一つ高い身長を持つた男だった。

「（な、なにコレ！？すべての数値がズバ抜けてる・・・。こんな高一男子の数値じゃない！！しかものびしろが見えないなんて・・・。）（これは・・・天賦の才能！・・・うつわ生で初めて見る）」

目を光らせて涎まででていた。

「今の姿をみて変態だと思わない方が難しいと私は思つ。」「キミさつきから失礼ねつ！つて、おお・・・」

「（さつきのやつと比べると若干劣るけど）（ちの数値もズバ抜けてる！-のびしろも見えない・・・こんな才能が2人も入ってくれるなんてラッキー）」

「カントク！いつまでボーッとしてんだよ！」

はつと気づいて、慌て口の端の涎を拭う。赤い目であきれたような視線を向けられ少し心が痛い。

「（めんつつでえつと・・・」

「全員視たつしょ。そいつでラスト」

「あつそう？・・・れ？」

相田はどこか不思議そうにしている。

「…………黒子君と白崎君の仲にいる？」

この一言に2年生は沸きだつた。

「あー、そうだ帝光中の……」

「えー!? 帝光ってあの帝光! ?」

「黒子……白崎……」

「黒子、白崎いるーー! ?」

「（あれー？ あんな強豪にいたんなら視りやすぐわかると思つたんだけど……）今日は休みみたいね。いーよじや あ練習始めよう! 」

「あの……すみません」

そう言つた相田の前には人影が……

「黒子はボクです」

「白崎は私です……」

…………。

「きやあああー!？」

その悲鳴に他の人達もそつちを見る。

「うわあー何?・・・・・・・・・うおうつー?ダレ?」

「こつからいたのー?」

「最初からいました」

「ウソオ!ー?」

「私に至つてはさつときガン見されていたのだが・・・。」

「(田の前にいて気づかなかつた・・・!?)え?今黒子つて
言つた!ええ!てゆーか・・・カゲ薄つすつつー!そしてそー
いえばこの白髪赤田!ー!なんで忘れてた私!?)」

「・・・え?じゃあつまつコイツらがー?『キセキの世代』のー?」

「まさかレギュラーじゃ・・・」

3人のやつとりを見ていた部員は黒子と白崎に田をやつた。

そしてぞわぞわと騒ぎだす。

「それはねーだろ。ねえ黒子君、白崎君。」

眼鏡の先輩が2人に同意を求めた。帝光のレギュラーがここにくる

わけがないという思いが、黒子の見た目からありえないと思つたか。
だが、2人の返答は・・・

「・・・?試合には出てましたけど・・・」

「控えとしてで出でていました。」

といつた。

「だよなー・・・うん?」

「え?・・・え!?」

「え、え、え、え、～～～～～!?」

先ほどよりも更に大きな叫びがあがる。

「　　（信じらんねえ～～～～～）」

「そこまで驚くことないでしょ?。レギュラーでなくとも試合には出られるのですから。」

「あ、ああ・・・すまん」

謝りはするがどこか納得してないようだ。

「ちよつ・・・シャツ脱いで!-!-

「え?着ちゃった・・・」

監督に言われてシャツを脱ぐ黒子。

「（身体能力をみたところで意味はないだろ？、黒子の能力には関係がない。）」

そんな事を考えつつ、こちらに集まる視線を受け流す。

しばらくみていたがやっと黒子の身体検査は終わったようだ。

「（・・・・・！？）オイちょっと聞きたいんだけど・・・帝光中とかキセキのなんたらとか」

デカイ赤髪が男子生徒に何か聞いていたが興味がないので無視していた。先輩たちの話を聞いてその日は解散となつた。

（M A J E B A R G A R E）

そこには火神がいた。・・・トレーに山積みになつたハンバーガーを持つて。

「（『キセキの世代』ね・・・、そいつらならもしかして・・・」

そんな事を考えながら席につくと田の前にさ・・・

「ぐわつー？」

「どうも・・・育ち盛りですね」

本を片手にシェイクを飲む黒子の姿があった。

「どうから・・・つか何やつてんだよ?」

「ボクが先に座つてたんですけど。人間観察してました」

「(こんなのが日本一の・・・!?)・・・つーか、は?・・・人間観察!?)」

火神は怪訝な顔をした。

・・・・・・・

「それより、ちょっとシラ貸せよ。これ食つてから

火神はそう言った。

（相田 said）

・・・あればどーゆーこと?

彼は何者なの?

能力値が低すぎる・・・!-

全ての能力が平均以下・・・

しかもすでにほぼ限界値なんて・・・

白崎君ならわかるけど、とても強豪校でレギュラーをとれる資質じゃない・・・・

そのことについて白崎君に聞いてみたら・・・

「黒子のことを言葉にして伝えてもよく理解することは不可能でしょ。実際に試合をすればすぐわかります。」

としか返つてこなかつた。

一体
!?

→ストリートバスケ場

「オマエ・・・一体何を隠してる?」

「・・・・?」

「・・・・・・オレは中学2年までアメリカにいた。日本戻^{コッヂ}つてきてガクゼンとしたよ、レベル低すぎて」

黒子は不思議そうにしている。火神は黒子に構わず続ける。

「オレが求めてんのはお遊びのバスケじゃねー。もつと全力で血が沸騰するような勝負がしてーんだ」

・・・火神の曰はあるで黙のよつに鋭くとがつている。

「……けどちつきいい事聞いたぜ。同学年に「キセキの世代」つて強え奴らがいるらしーな。オマエはそのチームにいたんだろ?」

火神はそう言つと、バスケットボールを黒子に渡した。

「オレもある程度は相手の強さはわかる。ヤル奴つてのは独特的の匂いがすんだよ……白崎つていつたか?あいつはスゲエ、強いやつの匂いがブンブンしやがる。が、オマエはオカシイ。弱けりや弱いなりに匂いはするはずなのに……オマエは何も匂わねー、強さが無臭なんだ。確かめさせてくれよ。オマエが……『キセキの世代』つてのがどんだけのもんか」

火神の口はますます獣じみたものになる。

「…………奇遇ですね」

「…………」来て初めて黒子が声を出した。

「ぼくもキミとやりたいと思つてたんですね。1対1」

黒子が汗ラカンを脱いだ。

そして、勝負が始まつた。

が、

「はあ!?(しつ・・・死ぬほど弱えええ! ! !)」

黒子はショートしても入らなかつたりドリブルミスしたりあつさりボールを奪われたり、早い話が弱かつた。

現在、火神16対黒子0

「（体格に恵まれてなくとも得意技極めて一流になつた選手は何人もいる。けどコイツはドリブルもシューートも素人に毛が生えたようなもん・・・取り柄もへつたくれもねえ・・・話になんねー！？！）

「

「ふざけんなよテメエ！..話聞いてたか！？どう自分を過大評価したらオレに勝てると思ったんだオイ！」

ついに火神がぶちギレた。

「まさか」

それに黒子は飄々と返す。

「火神君の方が強いに決まつてるじゃないですか。やる前からわかつてます」

なに言つてんだコイツ、とでも言いたげな顔であつさりと

「ケンカ売つてんのかオイ・・・どうこうつもりだ！」

火神が怒りに震えて怒鳴る。

「火神君の強さを直に見たかったからです、あとダンクも」

「...はあ！？」

そんな火神にもひるむことなく黒子は続ける。

「（つたく・・・ビーカしてたぜオレも・・・。ただ匂いもしね
ほど弱いだけかよ・・・。アホらし・・・）」

「あの・・・」

「あーもういいよ。弱え奴に興味はねーよ。・・・最後に一つ忠告
してやる」

火神は黒子を軽くあしらい荷物をかついだ。

「オマエバスケやめた方がいいよ。努力だの何だのどんな綺麗事言
つても世の中に才能つてのは厳然として“ある”。オマエにバスケ
の才能はねえ」

「・・・・・・・・それはいやです」

「・・・・・!？」

火神の遠慮のない言葉に黒子は黙ることなく返す。

「まずボクバスケ好きなんで。それから、見解の相違です。ボクは
誰が強いとかどうでもいいです」

「なんだと・・・」

この言葉に火神は怒つたように返す。

「ボクはキミとは違う。ボクは影だ」

「…………？」

火神は言葉の意味を理解していない。

黒子はそれ以上はなにも言わずに夜道を歩いて行った

翌日、外は雨が降っていた。

「ロード削った分練習時間余るな…………ビーアントク」

「（一年生の実力も見たかたし……）ちょっといいかもね。5
対5のミニゲームやるつー一年対一年で」

「センパイと試合つて…………！」

「覚えてるか、入部説明の時言つてた去年の成績……去年、一年
だけで決勝リーグまで行つてるつて…………！」

「マジで…………！」

「フツーじゃねえぞソレ…………！」

先輩達の実力を聞いて、一年はビビっていた。

「（…………たへへ、ルーキー達はどうまでやれるかな？）

「ぐるといじやねー。相手は弱いより強い方がいいに決まつてん

だろ！ 行くぞ！！

「何ともイノシシらしい思考」で・・・・・

「なんか言ったかコラア！」

そして始まつた一年対一年の試合・・・・・

「 い ま ま い 」

ナツシ！

卷之三

ノルマ

一発目から少神はタックで先制した

「…………（想像以上だわ…………！あんな粗げずりなセンスまかせのプレイでこの破壊力…………！）」

「どんでもねーなオイ……（即戦力どころかマジで化物だ）」

試合は進み現在11-8、一年がリードしていた。

「一年がおしてる！？」

「つーか火神だけでやつてるよー。」

「（んなことよつ・・・・・・・・クソツツ、神経逆なでされてしま
がねー・・・・・・・・）」

火神の機嫌が悪い理由・・・・・・それは。

バチッ

黒子は持っていたボールを弾かれあつさりと奪われてしまった。
このやり取りは試合が始まつてからずつと続いている。

「ステイール！？またアイツだ！」

「しつかりしるーーー！」

「（意味深な事喋つてた割にクソの役にも立ちやしねえ・・・・・・
ザ）のくせに口だけ達者つーのが・・・・・）一番イラつくん
だよーーー！」

イライラしながら火神はジャンプしてボールを弾いた。

「（そして何だアイツはつー試合始まつてからくらくに動いてねーー
・・）この程度かつまらねえ」

火神は試合開始からほとんど動かない白崎に對して失望したようだ。

「・・・・・・・・」

「もう火神止まんねーーー！」

「…………わけにはいかねーなー（怒）そろそろ大人しくして
もらおうか！」

#1-331-1

- 3 人 ! ?

怖い。これ以上はやらせないと火神に三人のマークがついた。なぜか顔が

「つまらねえとは詰つてくれるじやないか・・・」
先輩なめるなよ・・・

— · · · (怒) 一

「ええっ！？違つ！（汗）」

さつきのこの程度発言で怒らせたよつだ

「そこまでして火神を・・・・・」

「しかも……ボーラーを持つてなくとも2人……ボーラー

ルに触れさせもしない氣だ！」

火神が押さえられた結果、試合の流れはあつという間に逆転し15-40と一気に点差をつけられた。

「流石先輩達…………強いね」

「てゆーか勝てるわけなかつたし…………」

「もういいよ…………」

諦めの言葉を呴いた相手に火神は突つかつた。

「…………もういいって…………なんだそれオイ…………」

「落ち着いてください」

黒子は火神を宥めるため膝カツクンを実行した。

「…………！」

「手ぬるい、後頭部にハイキックを放て」

「テメ…………そして殺す気かっ！？」

宥めるどころか更に揉め事がヒートアップした。

「なんかモメてんぞ」

「黒子か…………そーいやいたな～～」

「（審判の私も途中から忘れてた…………んんー？あれ？マジでいつからだつて！？…………まさか）」

「すいません、適当にバスもえませんか」

「は？」

「（みづかへか・・・）黒子、こっちも準備はできた。必要か？」

「・・・よひへお願いします」

「がんばれ、あと3分！」

「（でか、もうつても何ができるんだよ？せめてボール取られんなよ
～～）」

ボールが黒子に手に渡った時、空気が変わり始めた。

「（この違和感はなに？もしかして…何かとんでもない事が起きてる…！？）」

次の瞬間、黒子が持っていたボールは「ゴール前にいた9番へとバスされていた。

「・・・・・え・・・・・あつ」

ボールに氣づくと9番はすぐにショートを決めた。

「・・・・・え」

「・・・・・な」

「入つ・・・・・ええー？今ビーやつてバス通つた！？」

「わからんねえ見逃した！！」

その後、誰も黒子のパスは止められず流れは再び一転し始めた。

「どーなつてんだ一体！？！」

「気がつくとパス通つて決まつてるー？」

「…………（存在感のなさを利用してパスの中継役に！？しかもボールに触つてる時間が極端に短い！…………じゃ彼はまさか…………元の力ゲの薄さを……もつと薄めたつてこと……！？）」

「ミステイレクション」……手品などに使われる人の意識を誘導するテクニック。

ミステイレクションによつて自分ではなく、ボールや他のプレーヤーなどに相手の意識を誘導する。

つまり　彼は試合中『カゲが薄い』と言つよつもつと正確に表現すると、自分以外を見るように仕向けている。

「こちらも動きますか……9番、5番が4番ヘループバスをしようとしています。4番は3Pの準備をしています、打たせないで。」

「ええつー？」

「なつー？」

全員が驚いた。体制を崩しながらも5番の先輩が4番へパス、4番の位置は3Pライン……驚いて打てなかつたが、ほとんど当たつ

ていた。

「（・・・始まりましたか）」

「12番、後ろへバス。13番へのバスは8番からステイールを狙われています！」

自らバスを受け取り、ゴールにせまる。8番の先輩が驚いているのを見るとまた的中。

「何でわかるんだ！？」

「しかも全部！？」

「1Jのショートは入ります！リバウンドはいりません、戻つて！」

「3Pショートだぞ！？」

外す確率の高い3Pにも迷わず戻る指示をだす。ボールは見事ネットを通過していた

「（1Jが黒子と白崎の……！）」

弱いと思っていた二人がこれ程の実力を持つていたという事に火神は驚きを隠せなかつた。

「（元帝光中のレギュラーでバス回しに特化した見えない選手・・・
・・・！）噂は知つてたけど実在するなんて・・・！』『キ
セキの世代』幻の6人目！そして白崎君・・・彼は多分、全ての
プレイを見抜きゲームを完全に掌握する・・・『神の守護者』

「……」

「あッ……」

「（しまつ・・・・・・・・・黒子のバスと白崎の指示に気をとられすぎた・・・・・・・・・・・）」

「火神……」

火神のマークが甘くなつた事により、再び火神が得点を稼ぎ44-45と一気に追い上げた。

「うわあ……信じらんねエ……」

「一 点 差 ! ?

「つたく、どっちか片方でもシンディのに・・・・・更に白崎も混ざるとなると（三人組んだ時のこの獵豊さは手がつけらんねーな）

「

「つちゅ……」

「バツ・・・・・・・・

ボールがパスされた先には黒子が待機しており、ボールの奪取に成功した。

「つおおー」

「いけえ黒子……」

ゴールに近づき、黒子はシュートを決めに行く。

「勝つ」

「無理です。」

誠以外勝利を確信したが・・・・・

ガボン・・・・・

ボールはゴールに入らなかつた。

「黒子にパス以外のことを任せてはいけません」

「…………だから弱ええ奴はムカツクんだよ。ちやんと決めろ
タコーーーー。」

ガンツ！

火神が最後にダンクを決めて、一年の勝利が決まつた。

「うわあああーー！」

「一年チームが勝ったあ！！？」

「ははっ（まあ・・・・・・・味方なら頼もしい限りつて）とか・・・・・」

以後して本田の部活は終了した。

「M A J E バーガー」

「・・・・・」

火神が座る席には黒子と白崎の姿があった。

「・・・・・ 何でまたいんだよ・・・・・」

「ボク達が座ってる所にキミが来るんです。好きだからです、このバニラショイク」

「私は黒子に話があるというからつきあつていいだけだ。ちなみにこれは爽健美茶だ。」

飲み物を飲みながら対応する

「どうか違う席行けよ」

「いやです」

「黒子次第だ」

「仲いいと思われんだろうが・・・・・・・・

「だつて先座つてたのボク達ですもん」

「・・・・・ ホラよ」

火神はトレイに積み上げられたハンバーガーを一つ取り、黒子と白崎に投げ渡した。

「？」

「一個やる。バスケ弱い奴に興味はねー。が、オマエのこと、それ一個分位は認めてやる」

「…………どうも」

「悪いが私はいらない、栄養摂取にも気を使っているのでね。ジャンクフードは食べる気になれん」

「どこのジジイだよ…………」

「ジジイではない一體のことを考えるのはスポーツ選手として当然のことだ！」

「夜9時に寝て、朝5時に起きて乾布摩擦する人ですか？」

「ジジイじゃね——か——！」

「…………」「キセキの世代」つてのはどんぐりこ強えーんだよ
？」

「」「？」

「じゃあオレが今やつたらどうなる?」

「…………瞬殺されます」

「馬鹿は人に勝てん」

黒子と白崎は即答で断言した。

「もつと違う言い方ねーのかよ……おいこら、白崎!…おまえ人外のバカだと言いてえのか!?(怒)」

「ただでさえ天才の5人が今年それぞれ違う強豪校に進学しました。まず間違いなくその中のどこかが頂点に立ちます(うちも可能性がないわけでもありませんが……)」

「…………ハツ、ハハハ」

「壊れたか?」

「いいね、火イつくぜそーゆーの…………決めた!そいつら全員ぶつ倒して日本一になつてやる」

「ムリだと思います」

「冗談は髪だけにしどけ」

「うおいつ!……つて、白髪のおまえに言われたくね——よ——」

それぞれの飲み物を飲みながら、一人は即答で言い切った。

「潜在能力だけならわかりません。でも今の完成度では彼らの足元

にも及ばない」

「今のおまえは少し高い位置にいるだけ。本物の化け物にはほど遠い」

「……ボクも決めました。ボクは脇役（影）だ……でも影は光が強いほど濃くなり光の白を際立たせる。主役（光）の影として、ボクも主役を日本一にする」

「私はバスケで勝つためにここに来た。化け物には及ばないが、少しはマシなおまえが使い物になることを期待する」

「…………ハツ、言ひな。勝手にしきよ」

「頑張ります」

「わかった、勝手にしきつ」

（NGシーン）

「…………もういいって…………なんだそれオイ……」

「落ち着いてください」（膝カツクン）

「黙れ・・・『メリツ』あつ」（膝力ツクンで狙いがそれでキツク

「火神イイイ——！」

すまん

「黒子はボクです」 「白崎は私です……」（後輩）

「どうでしたか？感想も聞かねといつれしこです。

「丹羅朝8・40の屋上ねー」（前書き）

丘崎の目的がわかります

「月曜朝8：40の屋上ねー」

（朝の教室）

「おーい白崎。」

「降旗君、でしたか？何か」用ですか？」

「おー、名前覚えてくれたのか。おまえ本入部屋もらつた？」

「いえ、まだですが。」

「じゃあもうつてきた方がいいぞ。俺らまだ仮入部状態だから試合には出られないらしいからな。2・Cの監督のとこ行けばもらえるから。」

「そりなんですか、教えてくれてありがと「う」やこます。」

「どういたしまして。・・・なあ、敬語やめない？」

「すみませんね、初対面の人にはどうしてもこうなつてしまふんです。」

「あれ？火神は？最初から敬語じゃなかつたけど。」

「なに言つてるんです？山猿は人ではないでしょ？。」

「ひどつー。？」

／2-C・昼休み／

「失礼します、相田リコ先輩はありますでしょうか？」

「……普通だ。」

「はい？」

「いや、さつき立て続けにびっくりしたから、つい。」

「はあ……あの二人と一緒にしないでください。大方、火神が大声で「監督！ ！ 本入部届けくれ！ ！」といつて勢いよくドアを開け放つて、黒子は直前まで気配消して「…………本入部届け下さい。」とでも言って、驚いて牛乳吹いたというところでしょうか？」

「そこまでわかるあなたの方が驚きだわ！ ？」

「一人の性格と少し残った牛乳の臭いから考えればすぐわかります、用件は一人と同じです。」

「はー……じゃあこれ、本入部届ね。あ、受け取るのは月曜朝8：40の屋上ね！」

「……その時間は朝礼が始まる直前ですが？」

「あら、覚えてた？ まあ、そのときのお楽しみひとつで

その場では聞き出せないとあきらめて2-Cを後にした

「ん？ あそこにはいるのは・・・」

教室に戻る途中、そこには掲示板に貼られた誠凛学生新聞を見る火神と黒子がいた。

「へー、ここにバスケット部って結構すげー・・・・のかな？」

「すういですよ。」

「・・・・・・・・！」

突然現れた黒子に火神は声も出ないくらいビックリした。

「テメーはー、フツーに出でーーー！ イヒヨーをつくなーーー！」

「おまえも静かにしろ、図書室前で大声は関心できない。」

「なつーー？ フイツがビックリするようなことするから・・・・！」

その横でじーーー、と口に人差し指を当てて火神を注意する黒子。

それを見て火神はついにキレた。

「おちよくつてんのか？ おちよくつてんだよな？ オイコラー！」

「・・・・・・違います。」

「やばい音が出ているぞ。」

火神は黒子の頭を鷲掴みして握り潰す勢いで握っていた。

「白崎君は監督のところに行つてきましたか?」

本入部届けに視線を向けていう黒子

「ああ、おれは日常ではもうと存在感を出せ。周りが迷惑する。」

（…………そーいやなんでだ？他の「キセキの世代」はみんなもつと強豪に行つたんだよな？なんでコイツらは行かなかつたんだ？）おー黒子、白崎…………

火神が考え方をしてる間に一人は話ながら教室に帰る。

火神が振り返った時には黒子と白崎の姿は当然ない。

「どーでもいいかそんなこと・・・・・・まあは・・・・・・（次
会つた時ブッ殺そう・・・・・・）」

メギギ・・・・・と音を立てながら火神は手すりを破壊した。

翌日・月曜8:40

「フツフツフ、待つていたぞ！」

屋上では腕を組みながらカントクが待機していた。

「…………アホなのか？」

「決闘？」

「これだけの人数に一人で勝てるなどと思ひまい。」

「つーか忘れてたけど…………月曜つてあと5分で朝礼じゃねーか！」

本日月曜は学生の恒例行事、朝礼である。

「とつとと受けとれよ。」

「その前に一つ言つとくことがあるわ。去年、主将にカントクを頼まれた時約束したの。全国目指してガチでバスケをやることーもし覚悟がなければ同好会もあるからそつちへどうぞ！ー」

「…………は？ そんなん…………」

「アンタラが強いのは知ってるわ。けどそれより大切なことを確認したいの。どんだけ練習を真面目にやっても、「いつか」だの「できれば」だのじゃいつまでも弱小だからね。具体的かつ高い目標とそれを必ず達成しようとする意志が欲しいの」

カントクの表情は真剣そのもので、バスケに対する熱意が感じられた。

「んで今ー！」から……学籍番号！名前！今年の目標を宣言しても
らいます！ちなみに私含め今いる2年も去年やつちやつたつ そり
に、できなかつた時は「」から今度は全裸で好きな「」に告つてもう
います！」

『え、え～～～～！～？』

最後の爆弾発言に一年全員が叫んだ。

「…………は？」

「（はあー？聞いてねー）」

「（いや勧誘の時言つてた…………～）」

「（けじまやか）」まで…………～（～）」

「さつさも言つたけど具体的で相当の高さのハードルでねー。」一回
戦突破」とか「がんばる」とかはやり直し。「

「（どうしよう…・・・・・てかマジかよー～）」

「（しかもコレあとで絶対オフられるぞ）」

ほとんどの一年が戸惑つ中、火神は平然とした顔をしていた。

「マゴーじゃねーか。テストにもなんねー」

火神は柵の上に飛び乗り、早速カントクの指令を実行した。

「1-B 8番!火神大我!..「キセキの世代」を倒して日本一になる!」

火神は樂々とカントクの指令を完了。

「次はー?早くしないと先生来ちゃうよ(つづアレ?・黒子君もダメ?白崎君は・・・)」

「仕方ないですね・・・早めに済ませた方がよせやつです。」

あまり乗り気ではなせやつだが、柵の前に移動して声を発する。

「1-A 12番!白崎誠!..「キセキの世代」を完全に沈黙させる!..」

大声で叫びやつをに戻る。

「これでよろしいですか?」

「まつ、OKかな。次はー?」

「すいません、ボク、声張るの苦手なんで拡声器使つてもいいですか?」

監督の真横に拡声器を持った黒子が登場。

「・・・・・いいケド」

そしてこざり田標を叫びましたその時・・・・・・

「『ハリー！ またかバスケ部！』

「あ、り今年は早い！？」

屋上に先生が現れ、バスケ部一同はしじめられ説教を受ける結果となつた。

（MAJエバーガー）

「ちよつと大声出したぐらいであんな怒るかよ？」

「未遂だつたのにボクも怒られました……」

「仕方ないだろ？、あのような勝手なまねをすれば怒られて当然だ。」

「

ずーん、と落ち込む黒子と、白崎の存在に気づき、火神は驚き飲み物を噴き出した。

「（…………店変えよーかなー）」

「…………あと困つたことになりました」

「ホントだよ…………ああー？ 何ー？」

「いきなり約束を果たせそうにないです」

「は？」

「なんかあれから屋上、厳戒態勢しかれたらしくて。入部できなかつたらどうしましょう」

「それはない、私と山猿だけなど考えるだけでおぞましい。」

「失礼にもほどがあるぞコノヤロー……それより一つ気になつてたんだけど、そもそもオマエらも幻の6人目やら神の守護者なんて言われるぐらい有名だろ? なんで他の5人みてーに名の知れた強豪校に行かねーんだ?」

一番疑問に思つていた事を火神は一人に向けて質問した。

「オマエらがバスケやるのには……なんか理由あんじゃねーの?」

「…………ボク達がいた中学校はバスケ強かつたんですけど」

「知つてるよ(怒)」

「そこには唯一無二の基本理念がありました。それは……」

「勝つことがすべて」

それが帝光の方針であり、そのために必要だったのはチームワークなどではなく、ただ「キセキの世代」が圧倒的個人技を行使するだけのバスケット。

それが最強…………でもそこには「チーム」というものが一切なかつた。

「6人は肯定してたけどボクには…………何か大切なものが欠落してる気がしたんです」

「…………で、なんだよ？ そうじやない…………オマエのバスケで「キセキの世代」倒しでもすんのか？」

「そう思つてたんですけど…………」

「マジかよー？」

「…………」

「それよりこの学校でボクは…………キミと先輩の言葉にシビれた。今ボクがバスケをやる一番の理由は…………君とこのチームを日本一にしたいからです」

「相変わらずよくそんな恥ずかしいセリフばっか言えんなーってかどつちにしろ「キセキの世代」は全員ぶつ倒すしな。白崎はどうしてだ？」

「私は昨日も言つたが、勝つためにここへきた。「勝つことがすべて」という帝光の方針にはもちろん賛成している。」

「そういうやさつきの人つて……じゃあなんで強豪校に行かなかつたんだ？ 誠凜より強いところなんていぐらでもあるだろ？」

全然わからない、という様子の火神。

「簡単なこと、私の求めているのは「勝利」ではなく「完全勝利」。

帝光時代、すべての試合で勝利した・・・だが、私の力が必要だったかと問われると肯定はできない。」

「は？ あんな未来予知じみたチカラを使えれば・・・」

「強すぎた・・・ということですか？」

火神の言葉を黒子が遮り、白崎が頭を縦にゆらした。

「そう、「キセキの世代」5人の力があればそれで十分。私は良く言えば勝利を100%にできる選手、だが実際は余剰戦力でしかなかつたと思う。接戦なんてものは数えるほどしかなかつた。」

「キセキの世代」5人が試合をすればダブル、トリプルスコアは当たり前。途中で相手が戦意消失して試合の結果が終了前に決まるなんていうのが当たり前だった。

「ゆえに、私の力を持つて勝利する。どうせなら無名の学校で強豪を倒す。それを成せば私自身満足する結果が得られるだろう、それが理由だ。」

「なるほどな・・・」

「もちろん、危ない試合を救つたこともある。無敗の栄光を守る守護者なんて意味の二つ名ももらつた。」

1軍だけでなく、2軍以下も負けが許されなかつた帝光。その試合へ同行し、危ない時は窮地も救つた。無敗伝説を守つた誇りもある。しかし、すべて格下・・・十分満足はできなかつた。

「もし、私を倒す価値があると思うのならば、いつでも勝負を受けよう。すべてに勝利することに意味がある。」

おまえには負けない発言に火神は黙のよつた田で

「上等じゃねーか・・・その言葉忘れるなー！」

ガタッと音を立てて火神は席から立ち上がった。

「黒子、一つ言つておく『したい』じゃねーよ。日本一にすんだよ！」

大量のハンバーガーを残して火神は帰つていった。

「黒子、君は自分が影だと言つ。ならば私はこいつ言おう、私は闇だ。この意味をどう取るかはおまえ次第・・・もちろん受け取り方によつては私を許せないとと思うかもしれない。」

「はい・・・」

「おまえに私の考えは受け入れがたいものかもしれない・・・だが、私は考えを変える気はない。」

「・・・・・・・」

「ではまた明日、ずいぶん長いことしゃべつてしまつたな・・・私らしくもない。」

そういうて帰るつとする白崎を黒子が捕まる。

「ボクに全部押しつけないでください、ビーフするんですか」のハンバーガー。」

火神が置いていった大量のハンバーガーを指さして言つた。

「仕方ない・・・」

ハンバーガーをどう処理したのかは一人のみが知る・・・

？？？「ハア！？なんだこのバーガーの山！？」

翌日、教室内はとても騒がしかつた。

「なんだ騒がしいな」

教室にやつてきた火神は窓側にできた集団の元へと近づいた。

「・・・・ハツ！」

グラウンドを見ると、そこには「日本一にします。」と白線で大きく書かれていた。

「黒子、名前はどうした・・・」

「あつ・・・」

後に「これは謎のミステリーサークルとして誠凛高校七不思議の一つとなるのであった。

放課後、バスケ部は練習に励んでいた。

「おい、カントクどした？練習試合申し込みに行くとか言ってたけど」

「さつき戻ったスよ。なんかスキップしてたし。オッケーだったみたいスね」

「・・・・・!—スキップして!—?」

一年のその言葉を聞いて主将はギョッとした表情に変わった。

「オイ、全員覚悟しどけ。アイツがスキップしてることとは・・・・・次の試合相手相当ヤベーザ」

そして噂をすれば何とやら・・・・・・鼻歌を歌いスキップしながらカントクがやってきた。

「あ、カントク・・・・・・おかえりなさい」

「ただいまー!—!メンすぐ着替えてくるね」

そのまま更衣室に向かうかと思ひきや、カントクはピタリと足を止めた。

「…………あとね、「キセキの世代」このアートと試合…………
・組んじやつたつ…………」

爆弾を投下した後、カントクはスキップして去つてこつた。

「…………」

「な？」

「…………！」

「マジ…………？」

「セ、誰がくるのや、…………」

みんな驚き（黒子含む）白崎は予想以上に早い再会に少しあきれた。

（NEXTシーン）

「1・A 12番—白崎誠！—生徒会に入つて部費を増額させる—

!

「そういう意味の田舎じやなにわよつー!?」

「月曜朝8:40の屋上ね!」(後書き)

次回キセキの一人登場です!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6909z/>

黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

2011年12月25日12時46分発行